

しれない。読みやすく、情報量も多く、視覚的にも楽しい入門書になっているといえるだろう。

(鎌田 繁 東京大学東洋文化研究所)

---

**山根聡『4億の少数派——南アジアのイスラーム』(イスラームを知る 8) 山川出版社 2011年  
114頁**

「イスラームを知る」シリーズ全12巻の第8巻である。いずれの巻も、グローバル化したイスラームが世界各地でどのような実態をもって展開しているのか、コンパクトに、しかし非常に充実した内容が盛り込まれ、近年のわが国のイスラーム研究の深化、多角化を幅広い読者に教えてくれる。その中で、本書は、インド、パキスタン、バングラデシュを中心に南アジアのムスリムを扱っている。この三か国に住むムスリムのおおよその人口が題名の4億人である。読者はまずこの4億という途方もない数と、「少数派」という組み合わせに気を引かれるにちがいない。

その意味を説明するために、著者はまず南アジアのムスリムの「二重の周縁性」を指摘する。すなわち、ヒンドゥー教徒が多数派を占めるインド世界におけるイスラームの周縁性と、アラブに中心をもつイスラーム世界における南アジアの周縁性である。4億人いても、インド・ムスリムはいつも少数派の扱いを受けてきた。さらにこのことは、わが国においては、ウルドゥー語やベンガリー語、パンジャービー語といった南アジア諸言語による文献を利用できる研究者が多くないこととあわせ、南アジアのイスラーム研究の蓄積が限定的であったことの理由ともなってきた。にもかかわらず、わが国の南アジア・イスラーム研究は少数ながら質の高い内容をもってたと著者は指摘する。

今日、テロやターリバーン、さまざまな紛争といった時事的な動向によって南アジアが注目されるが、そうしたことを含め、南アジアにおけるイスラーム的要素の影響の大きさを、あらためて捉え直すことで、南アジア研究全体を深化させ多角化することができる。冒頭でこの簡潔ながら本質的な問題意識が示されることによって、読者は南アジアのイスラーム世界の長い歴史の意味の大きさを実感するだろう。

本論の章立ては以下のようなものである。

- 第1章 インド・イスラーム文化
- 第2章 西欧的近代との出会い
- 第3章 イスラームの政治運動化
- 第4章 イスラームと国家の関係
- 第5章 世界情勢と南アジアのイスラーム

第1章では、南アジアに初めてイスラームがもたらされた8世紀から、19世紀なかばにムガル帝国が滅亡に至る約1100年の物語が紡がれる。インド世界にもたらされた一つの文化としてのイスラームが、ヒンドゥー的な信仰やサンスクリットの要素を取り込み、さらにペルシャやトルコの文芸的要素と融合して新しい文化を形成していく。スーフィーやバクティー、遍歴する大道芸人「バウル」、ムスリム商人層、そしてムガル皇帝と貴族たち、いずれもが文化を育て、継承する担い

手となって、独自にして豊かなインドのイスラームが育まれていく。やがてムガル帝国が衰退期に入ると、さまざまなイスラーム運動が活発化する。存在感を増していくイギリスが、徴税、行政に深く関与していく一方で、現地語に関心を持ち、教育機関を設立して東洋学と比較言語学の対象としてインドの古典研究がおこなわれ、イギリス人による文献の刊行や収集、文字の統一は、イスラーム文化に大きく貢献したことも解説されている。

著者の専門であるウルドゥー文学を中心に、文学作品が多く引用されていることで、長い歴史物語が生き生きとした色彩をもって描き出されている。この点は、全編をつうじて本書の大きな魅力として特筆されよう。

つづく第2章では、インド大反乱後イギリスの直接統治下に入ったインドで、ムスリムが比較的受難の時代に入るが、そこに起こってきたさまざまなムスリムの運動が描かれる。イスラーム復興運動もあり、近代改革運動もある。例えば、アリーガル運動の中でウルドゥー語の普及運動がおこり、その流れがやがてパキスタンへと連なっていくことや、さまざまな雑誌や書籍の刊行について、運動を担う人々の人脈とともに具体的に紹介されていて興味深い。

第3章は、ナショナリズムが台頭する時代に、ムスリムの政治運動がヒンドゥーとの協調から差異化へと変わっていく姿が描かれる。インド・ムスリムがオスマン帝国のカリフ擁護運動に深く共感したのはなぜなのか、今日の国民国家の枠組みを前提としては理解しにくいだが、ここで紹介されるマフムードゥル・ハサンやウバイドゥッラ・シンディーの動きを見ると自然な成り行きとして理解される。

またムハンマド・イクバルが、ヒンドゥーとの団結やインド単一民族論をうたった時代から、自我思想を確立しやがてインド単一民族は非現実的としてムスリム国家案に至る過程が、詩作の語彙や内容の変化から示されていて興味深い。ここでも、狭い国家やナショナリズムの枠を超えた思想家の行動範囲の広さが印象的である。

第4章では、パキスタン独立とその後、ズルフィカル・アリー・ブットー政権期までが、とくにイスラームと国家の関係が揺れ動く様子を軸に描かれる。ジンナーやアユーブ・ハーンの世俗的、脱イスラーム的方向から、ブットーに至ってイスラームが初めて国教化される過程が概観される。また章末には独立インドにおけるムスリムについての言及があり、少数派としての苦難とともに、多宗教社会の中で教義にとらわれない大衆的な「宗教」が、民間信仰や芸能の形で浸透、存続していることにも注意を促している。ところでこの章でもっとも多くの紙幅が割かれているのはパキスタンのジャマアアテ・イスラミーの創始者マウドゥーディーについてであるが、これは著者のマウドゥーディー研究を反映しており、読者にはぜひさらに巻末の主要著作欄にあげられている関連論文を参照されることをお勧めしたいと思う。

第5章は、1977年以降ズィヤール・ハク政権下でイスラーム国家化し、冷戦を背景に、アフガニスタンとカシュミールの紛争に深くかかわり、対テロ戦争に至る時期を扱うが、政治の流れよりも、むしろハムダルドやアーガー・ハーン財団、イムラーン・ハーンの病院、バングラデシュのモハメド・ユーススのグラミン銀行など、社会活動、慈善活動の展開を詳しく紹介している。イスラーム組織についても言及され、急進派を詳細に解説した一覧表も付され、幅広い読者にとっての資料的有用性も高いものと思われる。

また、現代南アジアのムスリムによる芸術文化についても、多岐にわたって言及されている。歴史的には文化活動を宗教別に語ることはできず、サンスクリット文献のペルシャ語訳や、ペルシャ語やウルドゥー語を駆使したヒンドゥー文人、非ムスリムによるイスラーム文献の刊行などの例が

示される。その上で、バングラデシュ、パキスタンの独立後の文学史、音楽、映画、書道、絵画など多岐にわたる文化に触れられていて興味深い。

移民社会についても各地の簡単なレビューが付されている。サイバーメディアの発展も重要だが、ウルドゥー語の詩会（ムシャーイラ）のような昔ながらの催しで在外パキスタン人が一堂に会する場面も紹介されている。

もう一つ、本論の合間に閑話休題のように挟み込まれるコラムがある。これは著者の南アジア研究と現地経験による知見の宝庫である。「南アジアのムスリム社会」「パンジャーブにおけるムスリムの知識層」「南アジアのムスリムと日本」「パキスタンにおける行政と軍の二輪走行」とテーマも幅広いが、とくに評者は「パンジャーブにおける……」と「南アジアの……」が感銘深かった。

本書を読んであらためて痛感することは、ウルドゥー語、パンジャービー語、ベンガリー語など現地の言語による史料の重要性と、そのような史料にもとづく地域研究の奥深さ、おもしろさである。先に指摘したとおり、文学作品など多くのウルドゥー語史料の引用が含まれ、融通無碍なインドの社会が生き生きと立ち上がってくる。通史的な部分をさらに削って、もっと多くのウルドゥー語史料が引用されても良かったかもしれないと感じるほどである。イスラーム化以来のインド史を一気に通読すると、ここ 30 年ほどの状況はにわかに対象化される。パキスタンがいつ破綻しても不思議ではないかのように論じる一部の論者には、本書は理論と現実を見比べるよすがとなるだろう。そして初学者にとってはもちろん、インド・ムスリムを学ぶすべての人に新しい視角を与えてくれるだろう。

（井上 あえか 就実大学人文科学部）

---

**小杉泰『イスラーム 文明と国家の形成』（学術選書）京都大学学術出版会 2012年 531頁**

本書は、イスラーム研究者として著名な小杉泰の、思想家・思想史家としての側面を強く印象づける労作である。嶋田襄平の『イスラームの国家と社会』、佐藤次高の『イスラームの国家と王権』に並ぶテーマをもった著作であり、取り扱う時代、地域、主題も非常に近い。嶋田の著作は、日本の東洋学の伝統と欧米のオリент学の成果を融合した、日本で初めての本格的なイスラーム国家形成論であり、佐藤の著作は、嶋田の著作を継承し土台とした上で、佐藤独自の豊かで広範な史料研究の成果をつぎ込んだ国家論、王権論であった。これに対して、小杉の本作は、さらにこの両作を土台とし、また海外や国内の最新の研究成果を広く吸収消化した上で、嶋田・佐藤とは大きく異なった視点すなわち思想史・文明論という立場からこれらを独自に再構築し、新たなイスラーム社会形成史を提出したものである。そこには、現代イスラーム研究の第一人者である小杉泰のイスラームに対するまなざしが大きく刻み込まれている。

それでは、本書の概要を紹介しよう。本書は、全 10 章からなっており、その章構成は以下の通りである。

はじめに

第 1 章 イスラーム圏の地理的・空間的拡大

第 2 章 文明的な展開